ANNUAL REPORT 2024

国際環境NGO グリーンピース・ジャパン

2024
年次報告書

GREENPEACE

Global Campaign

グリーンの輪は国境を越えて

気候危機に立ち向かい、自然を守りたいと願う世界から300万人以上のサポーターがグリーンピースの活動をご支援くださり、各地域で大きな成果を成し遂げることができました。

1. Norway

2. United Kingdom

3. European Union

4. Ghana

5. Indonesia

6. Australia

7. Galapagos

© Will Rose / Greenpeace

1.

北極圏での深海採掘を許可する計画にストップ！

北極圏で商業規模の深海採掘を世界で初めて許可しようとしたノルウェー政府。その計画を中断させることに成功しました。海底で鉱物資源を掘り出す深海採掘は、海の生態系に壊滅的な影響をもたらすことが予想されています。グリーンピースはヨーロッパ全土での協力体制のもと、欧州議会に海を守るための決議を呼びかけてきました。

2.

英国が石炭火力ゼロを達成！

イギリスで石炭火力発電の全廃が実現しました。G7で初の快挙です。グリーンピースは、石炭火力が英国の電力の3分の1以上を占めていた2000年代から、さまざまな抗議運動を続けてきました。2015年の総選挙では国中の環境活動家と連携し、全政党に石炭廃止に合意するよう働きかけたところ、主要政党の党首3人が党派を超えて共同声明を出し、気候変動対策として石炭火力発電を終わらせることを約束しました。石炭の利用で産業革命を起こした英国での廃止は、化石燃料からの脱却において重要な分岐点と言えます。

© Kate Davison / Greenpeace

© Eric De Mildt / Greenpeace

3.

多様な生態系を回復させるための法律がEUで施行

生態系の回復などを目的とする自然再生法が、欧州連合（EU）で正式に発効。この法律によって、EU内の陸地と海で劣悪な状態にある生息地を2030年までに20%以上、2050年までに90%以上再生するための措置を講じることが義務付けられました。法案の成立を後押ししてきたグリーンピースは引き続き、EU各国に野心的な自然再生計画を展開するよう求めていきます。

4.

ファストファッションが引き起こす汚染の実態を調査

欧米やアジア諸国から年間12万トンもの古着を輸入するガーナ。多くはファストファッションで、約半分が再販できず、焼却されるかゴミ山に捨てられています。グリーンピースの調査で廃棄衣類の約9割が合成繊維を含み、マイクロプラスチック汚染につながっていることが判明。また公共の洗濯場で発がん性物質などの有害物質が高濃度で検出され、深刻な大気汚染が生じていました。先進国で消費した衣類が、ガーナで健康被害をもたらすことを公表しました。

© Kevin McElvaney / Greenpeace

© Jurnasyanto Sukarno / Greenpeace

5.

インドネシアの熱帯雨林先住民族が土地権利を勝ち取る

インドネシアの南西パプア州に広がる熱帯雨林で、先住民の土地権利がようやく法的に認められました。住民たちは先祖から受け継いだ森を守るため、伐採や農地開発を行う企業や政府による搾取と長年にわたりたたかってきました。香港とほぼ同じ面積をもつこの地区で、森林破壊がおさまって権利が保証されるまで、グリーンピースは住民とともに活動を続けます。

6.

マクドナルドがオーストラリアで森林破壊ゼロを約束

森林破壊の最前線にあるオーストラリア。大規模な伐採によって、東部の2州だけで毎年推定5000万頭もの動物が命を奪われ、コアラやフクロモモンガなどの固有種が絶滅の危機に瀕しています。肉牛の牧草地をつくるための森林伐採が主な原因で、グリーンピースは牛肉を大量に扱う企業を調査し対応を求めてきました。支持する市民も数千に上るメールで企業に訴え、オーストラリアで牛肉を最も購入するマクドナルドとスーパー大手のウールワースが、森林破壊のない牛肉を調達することを約束しました。

© Justin Cally

© Markus Mauthe / Greenpeace

7.

ガラパゴス諸島で生態系調査 公海の保護区化を呼びかける

固有種の宝庫として知られ、ウミガメ、シュモクザメ、ウミイグアナなど3000種近くの海洋生物が棲むガラパゴス諸島。グリーンピースは海洋保護区の内外で生物多様性を調査しました。環境DNA分析などを用いて保護区内での豊かな生態系を記録。一方、保護区外の公海上ではプラスチック汚染や商業漁船による乱獲の影響がみられ、海洋保護区の重要性が鮮明になりました。世界の海の3分の2を占める公海で生物多様性を守るための国際協定が2023年、国連で合意されています。公海上の最初の保護区としてガラパゴス諸島の設定をめざしていきます。

Year in Pictures

© Tim Aubry / Greenpeace

© HAKUA / Greenpeace

© Tavish Campbell / Greenpeace

© Marie Jacquemin / Greenpeace

Message

2024年の活動をふりかえって

世界各地でかつてない規模の気象災害に見舞われた2024年。地球の平均気温は2年連続で観測史上最高を記録し、温暖化の影響が日々の暮らしや経済にも及びました。

皆さまの温かいご支援とご協力のおかげで、グリーンピース・ジャパンは2024年もさまざまな活動を展開することができました。心より感謝申し上げます。

気候変動対策

2024年の重点的な取り組みとして、再生可能エネルギーの導入促進と省エネの推進に力を入れました。年初には「かながわ脱炭素市民フォーラム」が発足し、神奈川県内でのネットワーク拡大とともに、太陽光発電の標準化に向けた具体的な一歩を踏み出しました。市民が主体となり、自治体に対してより積極的な気候対策を求める動きは、埼玉県や千葉県をはじめ、全国各地に広がりを見せています。

学校断熱プロジェクト

温暖化で猛暑による健康被害が相次ぐなか、子どもたちの学習環境を守るため、学校の断熱改修プロジェクトを本格的に始動しました。夏の教室で温熱環境の調査を行い、データを通じて建物の断熱化の必要性を明らかにしました。また、自治体への提言や特設サイトの開設などの取り組みが実を結び、神奈川県内の高校で断熱改修が実現しました。

これらの成果は、気候危機への対応が、私たちの暮らしや地域社会の質を高めることにもつながるということを示しています。

プラスチック問題

プラスチック問題に関しては、国際条約の制定に向けた議論が深まった年となりました。グリーンピースは、政府関係者や企業、専門家を招いて第2回「国際プラスチック条約シンポジウム」を国内で開催し、条約締結に向けた課題や解決策について活発な意見交換を行いました。

また、報道関係者向けの勉強会や、調査報告書『変革を先導する』の発表を通じて、使い捨てプラスチックの解決策となりうるリユースの可能性を広く発信し、理解の促進に努めました。同時に企業との対話も継続しており、サプライチェーンにおけるプラ削減の具体的な可能性を探りながら、前向きな協力関係の構築を進めています。

さらに、国際条約の内容を話し合う政府間会合には、日本からスタッフ数名がオブザーバーとして参加。交渉の現場で市民社会の声を届けるとともに、政府交渉官へのロビー活動を通じて、日本政府に対し積極的な貢献を求めました。条約の正式な締結は翌年に持ち越されたものの、これら一連の取り組みにより、「プラスチック汚染ゼロ」の未来に一歩近づいたと確信しています。

市民向けのイベントや展覧会

市民に向けた気候変動の活動では、2023年の東京開催に続き、滋賀と青森で「HELP展」の巡回展を催しました。温暖化が暮らしや地域にどのように影響するのか、アートを通じて感じてもらい、行動の後押しをするような展示とイベントを設計しました。滋賀では琵琶湖やその周辺の自然を、青森では地域の豊かな自然やリンゴ栽培をテーマに取り上げ、それぞれの地域性を活かした内容としました。前年の東京展も含め、延べ1,500人以上の来場者にご来場いただき、気候変動をより身近な問題として捉えてもらうことができました。

また、HELP展の一環として製作したドキュメンタリー作品が国際映画祭で大賞を受賞し、ニュースで広く報じられたことで、国内における温暖化の現状を知ってもらう貴重な機会となりました。

2025年も引き続き、市民の皆さまと力を合わせ、自治体や国レベルでの政策転換を後押ししてまいります。脱炭素社会の早期実現をめざし、新たな挑戦に取り組んでいきたいと考えています。今後とも変わらぬご支援、ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

グリーンピース・ジャパン
事務局長
サム・アネスリー

Climate Change

気候のことは暮らしのはなし

©Taishi Takahashi / Greenpeace

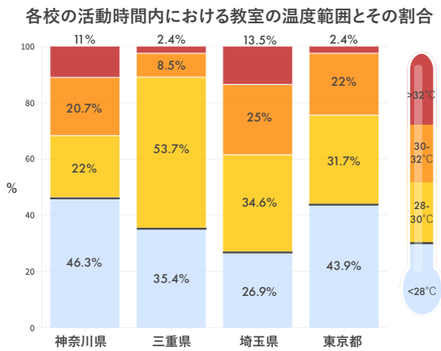
日本のエネルギー基本計画や、温室効果ガス削減目標の策定に向けた議論が行われた2024年。脱炭素社会への道筋を大きく左右するこれらの機会を捉え、良い変化を起こすために、国や自治体への政策提言活動に全力を投じて取り組みました。市民や専門家、他団体とも協働し、さまざまな角度から展開したキャンペーンの成果をお伝えします。

太陽光発電設備義務化のスピードアップに市民の声が貢献

2023年に東京都と川崎市で太陽光パネル設置の義務化が決定。この流れを拡大させるため、グリーンピースが事務局を務める「ゼロエミッションを実現する会」は、市民とともに、神奈川県で精力的に活動しました。行政への働きかけや市民への説明会を行った結果、前回の10倍となる858件ものパブリックコメントが寄せられ、県の「太陽光発電設備設置義務化」の後押しとなりました。実施状況を検討する対象が当初案での「先行自治体」から「国内外」へと変更され、海外の先進事例も含まれることになりました。これは、義務化導入までのスピードアップにつながる注目すべき成果です。

学校の温熱環境を調査 教室の過酷な暑さが明らかに

多くの学校は30〜40年以上前に建てられ、断熱がほとんど施されていません。異常気象が増えるなか、暑さや寒さから守られていない古い校舎で、子どもたちの学習環境が悪化しています。そこでグリーンピースは、学校の断熱改修を促進するためのプロジェクトを立ち上げました。



写真提供／東京大学建築学科 前真之准教授

実態把握のため、東京、神奈川、三重の小学校と埼玉の高校で7月1日から19日間、教室の温度を測定する調査を実施。その結果、エアコンが稼働しているにもかかわらず 、調査時間の半分以上で文科省の推奨する室温基準の上限28°Cを上回りました。猛暑となった7月8日には、4校すべてで一日中28°Cを超え、2校で30°C、1校で32°Cを下回ることがありませんでした。

調査の結果は多数のメディアで報じられたほか、複数の自治体議会や国会での質問資料としても活用され、国内議論の活性化につながりました。また、現状の問題点や断熱のメリット、いまできることを解説した特設サイトも公開。健康を守り、二酸化炭素（CO_2）排出削減に有効である断熱を政策として強化することをめざしています。

COP29に参加 現地で各国政府に働きかけ

アゼルバイジャンで開かれた国連気候変動枠組条約第29回締約国会議（COP29）に、グリーンピースからも日本のスタッフを含む代表団が参加。パリ協定で掲げられた1.5°C目標の達成に整合する決定や、責任ある選択と行動を先進国に求めました。イギリスが石炭火力の全廃を達成した一方で、日本は依然として石炭の段階的廃止の道筋すら示せていません。対応の遅れが国際的に厳しく評価されており、CO_2排出量が世界で5番目に多い日本には果たすべき役割が多く残されています。

©Marie Jacquemin / Greenpeace

国内自動車メーカーに排出量削減を求める

乗用車の販売台数で世界1位の座にあるトヨタ。同社が世界中で販売する乗用車および過去に販売した乗用車から排出される温室効果ガスの量は、毎年、日本の年間総排出量の約半分以上に相当します。

©Marie Jacquemin / Greenpeace

グリーンピースは、トヨタにパリ協定の1.5°C目標を達成できるよう、早期の脱炭素化を求める署名を世界から約3500筆集めました。これを受けて、COP29の開幕直前の11月はじめ、同社の気候変動対策を問う公開質問状を提出しました。この質問状では以下の3点について回答を求めました。

(1) トヨタの温室効果ガス排出削減目標と、気候変動に関する政府間パネル（IPCC）が示している1.5°Cシナリオの整合性

(2) 電気自動車（EV）の販売台数目標と温室効果ガス排出削減の関係

(3) 同社の気候目標と、グローバルサウスの脆弱な立場に置かれた人々の生命や生計への影響の関係

同社からは期限内に回答があり、その後、グリーンピースは対話を継続しています。今後もトヨタを中心に、日本の自動車会社がより野心的な気候変動対応に取り組むよう働きかけを続けていきます。

持続可能なモビリティの推進に向け、ビジョンレポートを発表

交通・運輸部門の温室効果ガス排出量は、日本国内だけ見ても全体の約2割を占めるほどのインパクトを持ちます。特に自家用車をはじめとする道路部門からの排出量は、過去数年間ほとんど減少していません。この分野の脱炭素を進めていくうえで、個人や各世帯が自動車を所有するライフスタイルから車のシェアリングへかえていくこと、自転車の利用や歩行がしやすいまちづくり、公共交通機関の活用がより求められています。

このような持続可能なモビリティ（移動手段）のあり方を、利便性や安全性、気候配慮といった観点から示したレポート『持続可能なモビリティー推進における課題と提案：グリーンピースのビジョン』を3月に公開しました。また、日本の人口減や高齢化といった事情も考慮した内容の日本語版も作成し、発表しました。

©HAKUA / Greenpeace

温暖化をアートで感じる「HELP展」
行動の輪を地域で広げる

「HELP展 ～30年後には消えてしまうかもしれない～」は、グリーンピースとクリエイティブユニットHAKUAが、気候危機を身近に感じてもらえるよう工夫を凝らして企画したアート展です。2023年の東京・青山での初開催で好評を博し、24年8月に滋賀県大津市で、続く10月には青森県弘前市で巡回展を開催しました。

巡回展は東京での作品を展示したほか、地元で活躍する多彩なゲストを招き、温暖化と地域への影響を語り合うトークイベントや、関連企画もあわせて開催。滋賀では高校生とのコラボレーションを行い、青森ではアップルクリエイティブアワードと連携しました。

©HAKUA / Greenpeace

HELP展は、使い捨て資材をできるだけ使用せず、終了後に展示品などを来場者に譲る「リユースできる展覧会」としても注目を集めました。

高校生とのコラボ企画では、若い世代と気候変動について考えるため、新聞制作の講習会を開きました。滋賀県内の3校から高校新聞部の生徒13人が参加し、グリーンピースのスタッフや、琵琶湖の水環境に詳しい京都大学生態学研究センター長、現役の新聞記者による講義を受けました。受講後は、高校生たちが「琵琶湖と気候変動」をテーマに新聞づくりに挑戦。完成した記事はグリーンピースが全面広告としてまとめ、COP開催期間中に地元新聞へ掲載しました。

高校生の記事をまとめたグリーンピースの全面広告（2024年11月、京都新聞に掲載）

さらに高校生たちは、制作した記事を携えて県内の国会議員事務所を訪問。気候変動対策について議員と意見を交わす機会をサポートしました。この活動の様子は、地元紙にも取り上げられました。

温暖化の影響を描いた映像作品が国際映画祭で最高賞を受賞！

グリーンピース・ジャパン製作の映像作品『御渡り/MIWATARI』が、2月にタイの国際映画祭で最優秀賞となるドキュメンタリー部門審査員大賞を見事に射止めました。御神渡りは長野県の諏訪湖でみられる自然現象で、温暖化の影響により発生が激減しています。地元の伝統文化としても根付く御神渡りが失われつつあるさまを映したこの作品は、HELP展での展示作としてクリエイティブユニットHAKUAと2023年に制作。24年11月には、COP29のサイドイベントでもダイジェスト上映されました。

COPイベント当日は渉外担当スタッフが登壇し作品の意図を伝えたほか、諏訪市長のビデオメッセージも紹介されました。また、撮影地である諏訪市でも上映会とトークイベントを開催。作品に主演した八剱神社宮司や地域の企業代表らが登壇し、発酵食品である日本酒や味噌づくりに気候変動がすでに大きく影響を及ぼしている現状を語りました。

From Our Team
担当者からのひと言

プロジェクト・マネジャー　高田久代

「HELP展」をきっかけに生まれた機会を活かすため、青森・滋賀・長野と駆け巡り、地元の方々や専門家、クリエイターの方々とたくさんの出会いを頂いた1年でした。気候変動はすでに私達の日常を変え始めています。変化を転機に、転機をチャンスに。今後も人との繋がりからチャンスを作っていきたいと思います。

気候変動／エネルギー担当　鈴木かずえ

市民が主役となって気候変動対策を推し進める「ゼロエミッションを実現する会」を立ち上げて、早4年になります。活動経験がなく、議員に電話1本かけることもおぼつかなかった仲間たちが、いまや各地で自治体の気候対策を進める成果を上げています。コミュニティが成長するなか、市民の活動をさらに支えていくために、伴走できるオーガナイザーも今後育てていきます。

気候変動／エネルギー担当　塩畑真里子

年の瀬も迫って飛び込んできたシリアのアサド政権崩壊のニュース。前職でシリア支援には深く関わっていたので感慨深いものがありました。同国で2011年に始まった危機は、気候変動による降雨量低下により大規模な人口移動が起きていたことから、気候危機に起因するという見方をする人も多いです。シリアの平和と安定を願ってやみません。

Plastic Free

使い捨てない豊かな生活をめざす

©Deirdre Leowinata / Greenpeace

私たちの暮らしにあふれるプラスチック。どこにでもある便利な素材が、気候変動、生物多様性の損失、汚染という地球の3つの危機を静かに進行させています。このままではプラごみ量が2060年には3倍まで増え、海に流れ出たプラスチックが魚の数を上回る日もそう遠くありません。グリーンピースは地球にやさしい仕組みへの転換を企業に働きかけ、国際社会のルールづくりを後押しすることで、プラスチック問題の解決に取り組んでいます。

使い捨てずリユースする時代へ

コンビニとカフェの使い捨て容器包装の消費量と環境負荷を分析調査

カフェ大手（スターバックス、タリーズ、プロント）とコンビニ大手（セブンイレブン、ファミリーマート、ローソン）を対象に、各社が排出する使い捨て容器包装の量を調査しました。その結果、カフェ3社で4億7,480万個のカップ、コンビニ3社で19億7,860万個のカップが1年間で消費されたことがわかりました。

さらに、これらの企業がリユースカップシステムを導入した場合に減らせる環境負荷を、ライフサイクル分析（LCA）を用いて数値化。1日のテイクアウト飲料を繰り返し使えるリユース容器にすれば、1カップあたりでCO_2排出量57%、水の使用量36%、化石燃料の消費量62%を削減できる結果となりました。

こうした調査データをまとめ、報告書『変革を先導する：日本のコンビニエンスストアとカフェチェーンの企業責任およびリユースの解決策』を11月に発表。使い捨ての容器包装を大量に排出する企業がリユースに転換することで、環境に好影響を与えられることを訴えました。

また、コンビニやカフェチェーンにはこれまで具体的な提案や連携強化の働きかけも行っており、数社がリユース実証実験に参加したり、リユースシステム導入を検討したりする動きにつながっています。

■ カフェチェーン各社で1年間に消費された使い捨てカップの数

■ 大手コンビニ3社では、19億個もの使い捨て飲料カップが流通

■ 貸出式リユースカップにすれば減らせる環境負荷

2023年、カフェとコンビニ大手6社がテイクアウト飲料（*）で消費した使い捨てカップの数は、合計22億杯を超えた。図は、これらの飲料を100%リユースカップで提供した場合、低減できる環境負荷。*レジカウンターで販売されるコーヒーなどのカップ入りのドリンク。

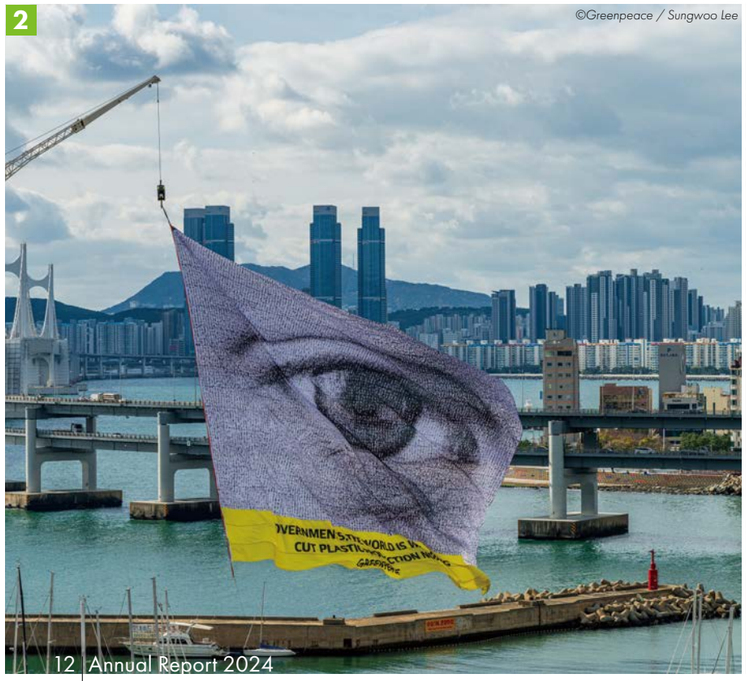
ごみゼロで買い物ができるマップを公開

使い捨てのごみを出さずに買い物したい——そんな思いに役立てるよう、Webマップ「グッバイ・ウェイスト」をリニューアル公開しました。このサイトでは、リユース容器の貸し出しを行っている事業者や飲食店を地図上で探すことができるほか、「事業者のサービス内容を知る」「国内外のリユース情報にアクセスする」といった機能を搭載しています。企業によるリユースシステム導入の重要性を明確に伝えるとともに、すでに運営されている全国のリユースシステムの可視化を実現しました。ぜひ一度のぞいてみてください！

「グッバイ・ウェイスト」マップ
▶https://goodbyewaste.jp

Plastic Free

1 ©Riska Munawarah / Greenpeace



2 ©Greenpeace / Sungwoo Lee

3 ©Seunghyoek Choi / Break Free From Plastics / Uproot Plastics Coalition

4 ©Greenpeace

使い捨てずリユースする時代へ

野心的な条約の実現をめざし、国内外でキャンペーン

プラスチック汚染の根絶をめざす国際条約の制定が重要な局面を迎えています。グリーンピースは世界中のオフィスで連携し、プラスチックの生産制限とリユースを推進する野心的な条約が定められるよう、国際的な政策提言活動を展開しました。

条約の内容を決める5回目の政府間会合に先立ち、グリーンピース・東アジアは、日本、韓国、台湾が年間4,199万トンに上るプラスチック生産能力を持つことを調査し、報告書にまとめ公開しました。生産制限が条約に盛り込まれなければ、二酸化炭素換算で9,993万トンがわずか3市場で排出される可能性を示しています。

条約締結に向けて韓国の釜山で開かれた会合には、日本からもスタッフが現地参加し、各国政府の交渉官への働きかけや報道関係者への情報提供に取り組みました。また会期前には、グリーンピースも参加する国際ネットワークが強力なプラ条約を求めて、会場周辺でパレードを実施。「プラ汚染NO！」という意思を政策決定者に向けてアピールしました。

この会合では条約合意に至らなかったものの、世界の各団体と連携して抜け穴だらけの条約が制定されるという最悪の事態を回避し、次につながる可能性を残すことができました。

産官学シンポジウムの開催と若者会議の立ち上げ

韓国での政府間会合を前に、グリーンピースとイクレイ日本事務局は「国際プラスチック条約シンポジウム」を共催しました。前年に続いて2回目の開催で、環境省や企業、市民団体、研究機関などからの登壇者らが情報共有と議論を行い、約100人が参加する盛況となりました。

また、気候変動の国際会議（COP）とは異なり、プラスチック条約には若者の参加機会が少なく、次世代の声を条約内容に反映させられるよう、「プラスチック若者会議」を立ち上げました。プラスチック問題に危機感をもつ13歳～30歳までのユース世代約50人が全国から参加し、専門家や関係省庁へのヒアリングをもとに提言書を完成させました。関係省庁や政党に提言を届け、シンポジウムでも発表するなど、若い世代とともに未来を描き、その声を産官学に伝えました。

© Greenpeace

第2回国際プラスチック条約シンポジウムの登壇者ら。環境省の条約交渉官やプラ削減事業を行う企業人など、産学官民のステークホルダー10人が問題解決の糸口について議論しました。

世界350社の企業が署名国際機運を高める

グリーンピースは他団体と協力し、プラスチックの生産制限や使い捨てプラの段階的廃止、リユース目標の設定などを盛り込んだ、強力な国際プラ条約を各国政府に求める公開書簡プロジェクト「Champions of Change」を実施しました。ラッシュ（LUSH）やベン&ジェリーズ（Ben & Jerry's）など、世界で350を超える企業が署名する大規模なキャンペーンで、日本からもリユース容器シェアリングの3社が参加。経済界や市民社会と連携して国際的な機運を高めました。

© Mitja Kobal / Greenpeace

1 インドネシア・アチェ州の海岸で地域の人たちとプラスチックごみを拾い、記録する海洋学者。
2 韓国で開かれた政府間会合の会場近くに、6,472人の顔写真で描いた巨大な「眼」の旗を掲げ、世界中の市民が交渉を見守っていることを伝えました。
3 韓国会合の開幕前、約1500人が野心的なプラスチック条約の実現を求めて会場周辺を行進。
4 2022年、国連環境総会で合意されたプラスチック条約の策定。韓国・釜山で開かれた5回目の政府間交渉委員会で、熱弁を振るうパナマ代表。

Greenpeace Supporters

グリーンピースはサポーターの皆さまに支えられています

©Tim Aubry / Greenpeace

社会で変化を起こすムーブメントの原動力となるのが、サポーターの皆さんです。グリーンピースの活動をご寄付で支えるサポーターは、想いをともにする仲間でもあります。個人としても環境問題に取り組む方々がメッセージを寄せてくださいました。

グリーンピースサポーターから希望のメッセージ

平島安人さま

1986年のチェルノブイリ原発事故で原発を作り増やそうとする社会のあり方に疑問を持ち始め、1997年初頭に中村梧郎さんの講演を聴き、「考えているだけではだめだ、行動しよう」と決心。まずクルマ利用の徹底的回避をスタートしました。信州人にとってはきつい取り組みですが、ずっと続けています。

もう一つが環境関連のNGO応援。いろいろな団体を調べ、最もまっとうなことを言い行動しているのはグリーンピースだ！とわかり、寄付を続けています。尊敬する故松本泰子さんの活動母体だったこともグリーンピースへの大いなるシンパシーを生んでくれました。

山口有里さま

私は学生時代に環境問題に関心を持ち、最も変革が期待された化石資源を扱うエネルギー企業に入社し、葛藤の中に身を置く選択をしました。現在は「リジェネレーション（あらゆる生命のつながりの再生）」を軸に、社外でもさまざまな活動をしていますが、一社員として変革の一助となる目標も持ち続けています。

常に真摯に最前線で警鐘を鳴らしてくださるグリーンピースとつながることで、危機感を忘れず、現実を直視し続けたいと思い、継続寄付をさせていただいています。立場は異なれど、希望ある未来を諦めることなく歩む仲間でありたいと願っております。

遺贈寄付　～子どもたちの未来に何を残したいですか？

個人の皆さまからのご寄付のみで活動しているグリーンピースにとって、遺贈は重要なご寄付の方法のひとつです。遺贈とは、遺言によって財産の一部、もしくはすべてを寄付いただくことです。シニア・フィランソロピー・アドバイザーで、遺贈を担当する藤本直孝が、遺贈寄付に関連するグリーンピースの活動を振り返ります。

©Chanklang Kanthong / Greenpeace

©Constantinos Stathias / Greenpeace

最近、テレビや雑誌などで、遺贈について目にする機会が増えているように思います。

遺贈寄付についてのお問い合わせは増えており、関心の高まりを感じています。これまでも実際に遺贈を頂戴することもありましたし、公正証書遺言にグリーンピースへの寄付を記したいというお声もありました。サポーターの皆さまへ遺贈に関するアンケートを実施した際は、多くの方が遺贈についての資料をご希望されました。ただ、遺贈＝高額の寄付とお考えの方が多く、少額でも可能だとご存じない方もいらしたので、もっと遺贈について知っていただくことが大切だと感じています。

ただ関心はあっても、実際に遺言書を書くのはなかなかハードルが高いのでは？

きっかけがないと難しいかもしれないですね。そこで専門家をお招きして、エンディングノートを書くワークショップを実施したんです。エンディングノートは書けるところから少しずつ始めればよいとか、自分の場合には遺言書をどう書けば良いかなどを具体的にイメージいただけたようです。新たな発見も多かったようで好評でした。このイベントは、2025年も継続していきます。

遺贈寄付は額の多少に関係なくできるとのことですが、財産というほどのものはないと仰る方も多くおられると聞きます。現金でなくともよいのですか？

不動産や金融資産など現物も受付可能です。特に最近は、不動産を寄付したいというお問い合わせをしばしば頂戴するため、これまでより幅広く不動産を受けられるように体制を整えました。金額などを指定する特定遺贈だけでなく、財産の一部、もしくはすべてを遺贈する包括遺贈についても、事前にご相談いただくことで、できるだけお気持ちに添えるように対応させていただきたいと考えています。

遺言書を書くには専門家への相談も必要だと思うんですが、そうなると費用が心配です。

そういうご心配にお応えして、グリーンピースのパートナーである日本承継寄付協会が実施しているキャンペーン『フリーウィルズキャンペーン』にも参加しています。23年度、24年度と実施しましたが、遺言書の作成にかかる費用のうち、10万円が助成されるものです。キャンペーン実施の際には告知していますので、ご活用いただけましたら幸いです。

身近に専門家がいない場合はどうすればいいでしょうか？

グリーンピースでは専門家の紹介も可能です。環境問題に関心の高い弁護士や遺贈に詳しい司法書士とのネットワークがあるので、お住いの地域にご紹介できる専門家がいるかお探しします。お気軽にお問合せください。

遺贈担当者として、藤本さんからのメッセージをお願いします。

相続という言葉からは、“家”をイメージしがちですが、まず大切なのは自分の意思だと思うんですね。未来に自分の意思を遺す方法として、遺贈はとても素晴らしい選択だと思います。遺贈に関するアンケートでも、「今より少しでもよい社会を築き、遺していくのが義務だと思っています」といったご意見や、「安全に生活していける美しい自然豊かな地球を遺したいです」といったお気持ちを書いてくださる方が多くいらっしゃいました。そういうお気持ちを大切に丁寧に受け止めて、仕事に取り組んでいきたいと思います。

グリーンピース・ジャパンでは、現金だけでなく、包括遺贈や不動産や土地のご寄付も受け付けています。もちろん、少額からのご寄付や、残ったらという指定の方法も可能です。遺贈を具体的にご検討されている方、あるいは弁護士など専門家への無料相談をご予約くださった方には、特製エンディングノートを差し上げております。
ぜひ、お気軽にお問い合わせください。
☎ **03-5050-0075**（遺贈 / サポーター窓口）

Volunteers & Interns

ボランティアとインターンは
変化のうねりを大きくする仲間たち

ボランティアの皆さんとともに

より多くの市民がグリーンピースのキャンペーンに気軽に楽しく参加できるよう、工夫を凝らした様々な活動を展開しています。2024年は「アクションボランティア」のチームも始動。それぞれのアイデアや個性を活かした活動を行うなかで、たくさんの人がグリーンピースの素敵な仲間となりました。

©Taishi Takahashi / Greenpeace

©Taishi Takahashi / Greenpeace

暑すぎる教室の擬似体験イベント 断熱の問題を広める

温暖化が進むなか、子どもたちは断熱の施されていない校舎で、過酷な暑さにさらされています。教室がエアコンを稼働していても、外気温とほぼ変わらない環境であることを実感してもらうため、7月中旬、東京・お台場の広場に教室を再現するイベント「学校断熱展示会〜暑すぎる教室体験してください〜」を開催。通りかかった人に擬似体験してもらい、解説パンフレットも配布しながら、教室の暑さや解決策となる断熱改修について訴えました。

イベントをきっかけに、国内外の主要メディアや教育専門誌が計18件にわたりこの問題を取り上げ、学校における断熱の必要性がより多くの人々に認識されることにつながりました。

「フジロックフェスティバル'24」に参加

国内最大級の野外音楽イベント、フジロックフェスティバルのNGOヴィレッジにグリーンピースと「ゼロエミッションを実現する会」が出展。他の環境NGOとの合同ブースで、気候危機に関する展示やトークイベントを行いました。約150人がブースに来場し、登壇したトークでは約170人にグリーンピースの活動を紹介。年々厳しくなる暑さのなか、異常気象の影響を大きく受ける真夏に開催される野外イベントだからこそ、多くの来場者に気候変動について知ってもらい、行動のきっかけを持ち帰る機会となりました。

リユースで買い物 プラスチック問題を楽しく学ぶ体験型イベント

プラスチックにまつわる環境問題を学べるイベント、「親子でリユース買い物体験 〜使い捨てプラ時代からリユース時代へ」を11月末、東京・目黒で開催しました。親子連れなど32人の参加者が、マイクロプラスチック汚染をテーマにしたドキュメンタリー映画を鑑賞した後、使い捨て容器を使わないランチのテイクアウトに挑戦。グリーンピース作成の「中目黒駅周辺グルメMAP」を見ながら飲食店をめぐり、貸し出されるリユース容器や持参した容器で持ち帰りができるかをトライしました。

参加者からは「最初は戸惑ったが、慣れると容器をずっと持ち歩かなくて済むのでとても便利。また使ってみたいです」「案外すんなりと持参した容器に入れてもらえた」といった声も聞かれ、問題を知り、脱プラへの行動をその場で実践できるイベントとなりました。

©Julius Schrank / Greenpeace
©Kengo Yoda / Greenpeace

©Jilson Tiu / Greenpeace

インターンの活動

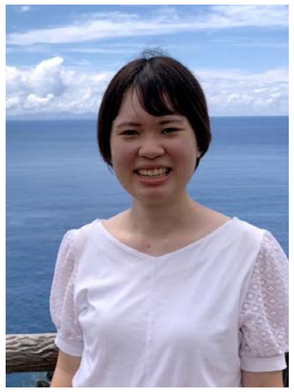
気候変動の影響を生涯でより長く受けることになるのが、若い世代です。2024年は10代から30代までのインターン生14名が、スタッフと肩を並べてキャンペーンに取り組みました。コミュニティ運営からシンポジウムなどのイベント企画、各種プロジェクトのリサーチや資料作成まで、さまざまな場面で活躍しました。それまでも他団体や個人で活動していた2人が、グリーンピースでの経験をお伝えします。

山本大貴さん
（担当：政策提言）

政策渉外担当のインターンとして、国会議員に関するリサーチや働きかけの戦略形成、実際の提言活動、他団体との連携業務などに携わりました。気候分野では地球温暖化対策計画やエネルギー基本計画、プラスチック分野では国際プラ条約を主なテーマとして活動しました。

常に素早く柔軟な対応が求められたので、プロジェクトに向き合う基礎体力だけでなく、瞬発力や決断力が短期間で大きく成長したと思います。また、気候変動については活動経験がありましたが、政策提言活動に集中的に取り組むのは初めてだったため、新しい視点を学ぶ機会でもありました。経験を今後に活かしたいです。

阪田留菜さん
（担当：気候変動コミュニティ）



インターンとして気候変動の解決に向けた取り組みに携わった約8カ月間は、自分に自信がついた期間でした。以前から一人の市民として「ゼロエミッションを実現する会」に所属し活動していましたが、事務局という立場から関わることで、戦略的に市民と協働する方法を知りました。学校断熱のプロジェクトでは、建築や教育といった環境以外の専門的な知識も学びながら業務ができました。

同じチームの人たちはやりたいことがあったら背中を押してくれることが多く、働きやすかったです。非営利組織で働くことに関心があったので、短い期間でしたが学生のうちに経験できてよかったです。

Financial Report

会計報告

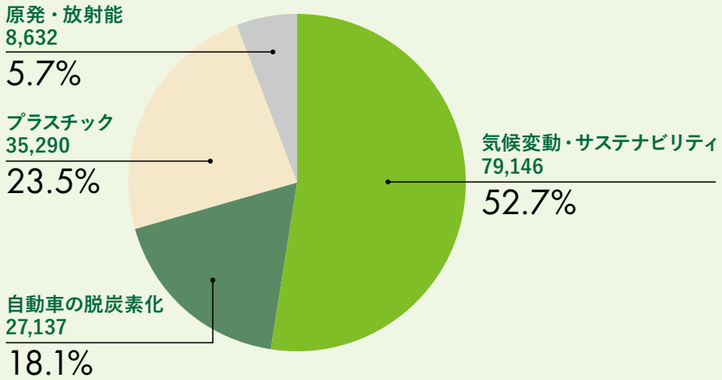
グリーンピース・ジャパンの2024年度（1月〜12月）における財務報告書は、日本の「一般に公正妥当と認められる監査の基準」(J-GAAS）に準拠して作成され、SCS国際有限責任監査法人により会計監査を受けています。2024年度は昨年に引き続き、グリーンピース・東アジア、本部であるグリーンピース・インターナショナルに加え、個人基金等からも人的・資金的な支援を得て、気候変動、エネルギー分野、プラスチック問題などに精力的に取り組みました。

2024年度、グリーンピース・東アジアからの助成金は、過去3年間の平均と比較して22%増となったこともあり、収支均衡の取れた年度末決算となりました。グリーンピース・ジャパンの寄付収入は、前年度と比べて、14%減となりました。全体での2024年の収入は5億1,707万円でした。活動支出は前年度と比べ15%増の5億1,707万円となりました。

グリーンピースは企業や政府から資金援助を一切受けていない国際環境NGOです。この独立した立場を保つには、個人からのご寄付が不可欠です。2024年度も皆さまの支えのおかげで、グリーンピース・ジャパンは環境保護と持続可能な社会の実現のため、調査活動や企業・政府への働きかけ、メディアやサポーターをはじめとした多くの方々への情報提供と協働を行うことができました。私どもの活動を支えてくださった皆さまに、心より感謝申し上げます。

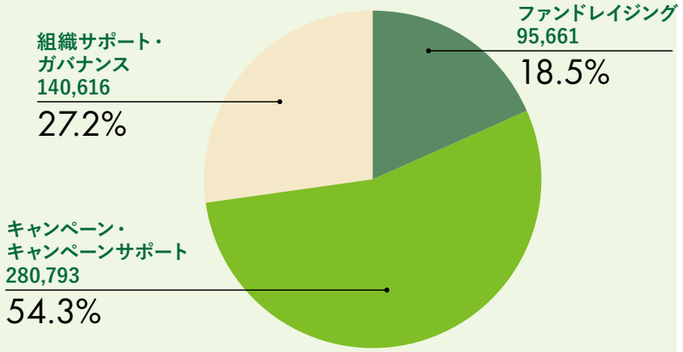
2024年　キャンペーン支出内訳

単位：千円



2024年　活動支出内訳

単位：千円



グリーンピース・ジャパンの収入と支出

（単位：千円）

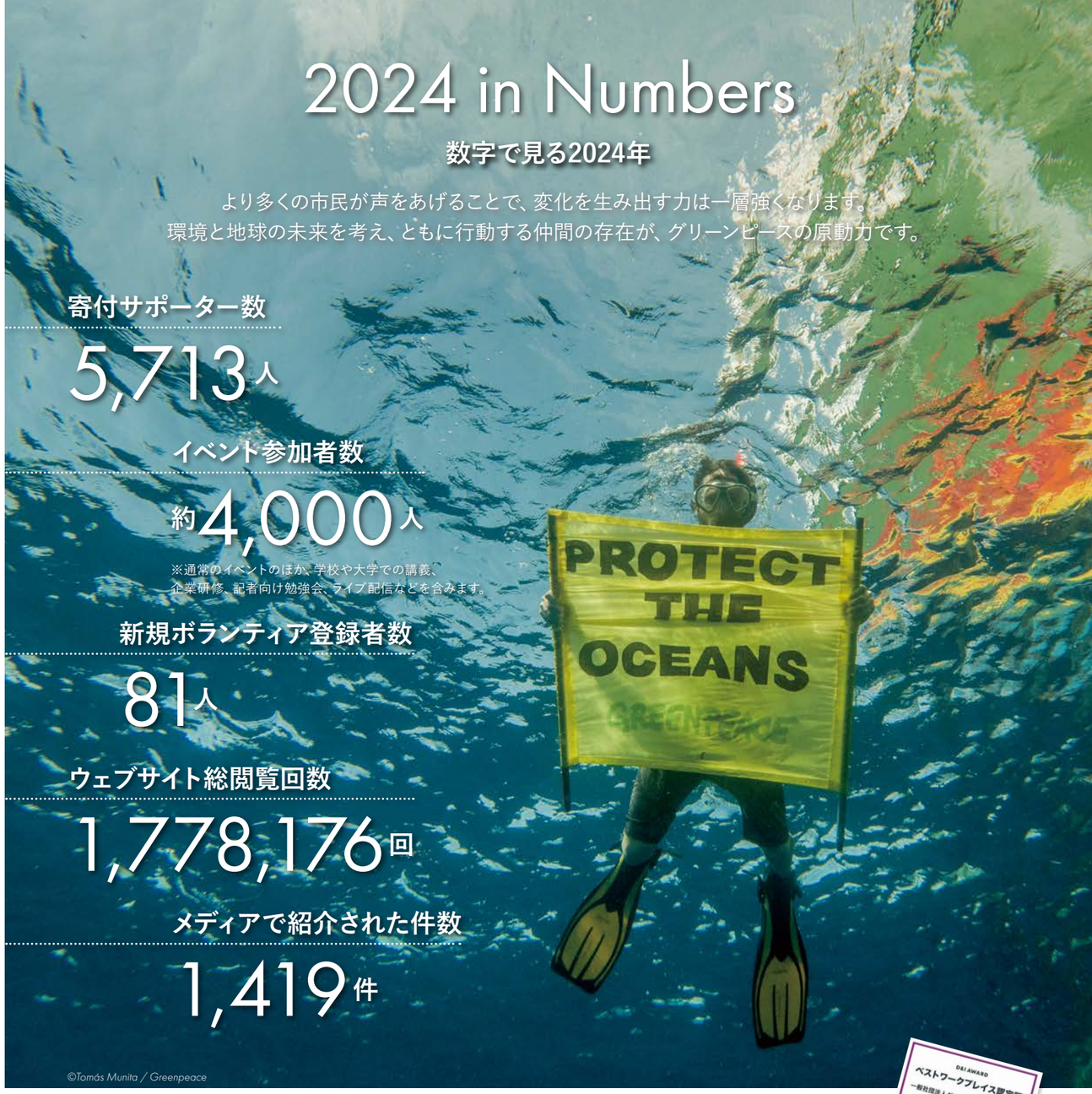
収入	2024年度	2023年度	2022年度
寄付収入	168,335	195,517	208,769
グリーンピース 東アジア／本部からの助成金	346,848	218,985	288,955
その他	1,887	392	0
収入合計	**517,070**	**414,894**	**497,724**

支出	2024年度	2023年度	2022年度
キャンペーン	150,205	123,134	116,479
キャンペーンサポート	130,588	104,894	82,151
ファンドレイジング	95,661	99,935	107,257
組織サポート・ガバナンス	140,616	121,094	102,744
活動支出合計	**517,070**	**449,057**	**408,631**

2024 in Numbers

数字で見る2024年

より多くの市民が声をあげることで、変化を生み出す力は一層強くなります。
環境と地球の未来を考え、ともに行動する仲間の存在が、グリーンピースの原動力です。



©Tomás Munita / Greenpeace

寄付サポーター数

5,713人

イベント参加者数

約4,000人

※通常のイベントのほか、学校や大学での講義、企業研修、記者向け勉強会、ライブ配信などを含みます。

新規ボランティア登録者数

81人

ウェブサイト総閲覧回数

1,778,176回

メディアで紹介された件数

1,419件

2024年も「ベストワークプレイス」認定

理想の実現は、社会全体だけでなく、組織の内側からも取り組む必要があります。グリーンピースは、JEDIS（正義・公平性・多様性・包括性・安全性）の原則を重視し、インクルーシブな職場づくりに努めてきました。

その取り組みが評価され、グリーンピース・ジャパンは多様性と包括性のある職場づくりに取り組む企業を認定・表彰する日本最大級のアワード「D&Iアワード2024」において、ベストワークプレイスに選ばれました。2022年に続き、2回目の受賞となりました。

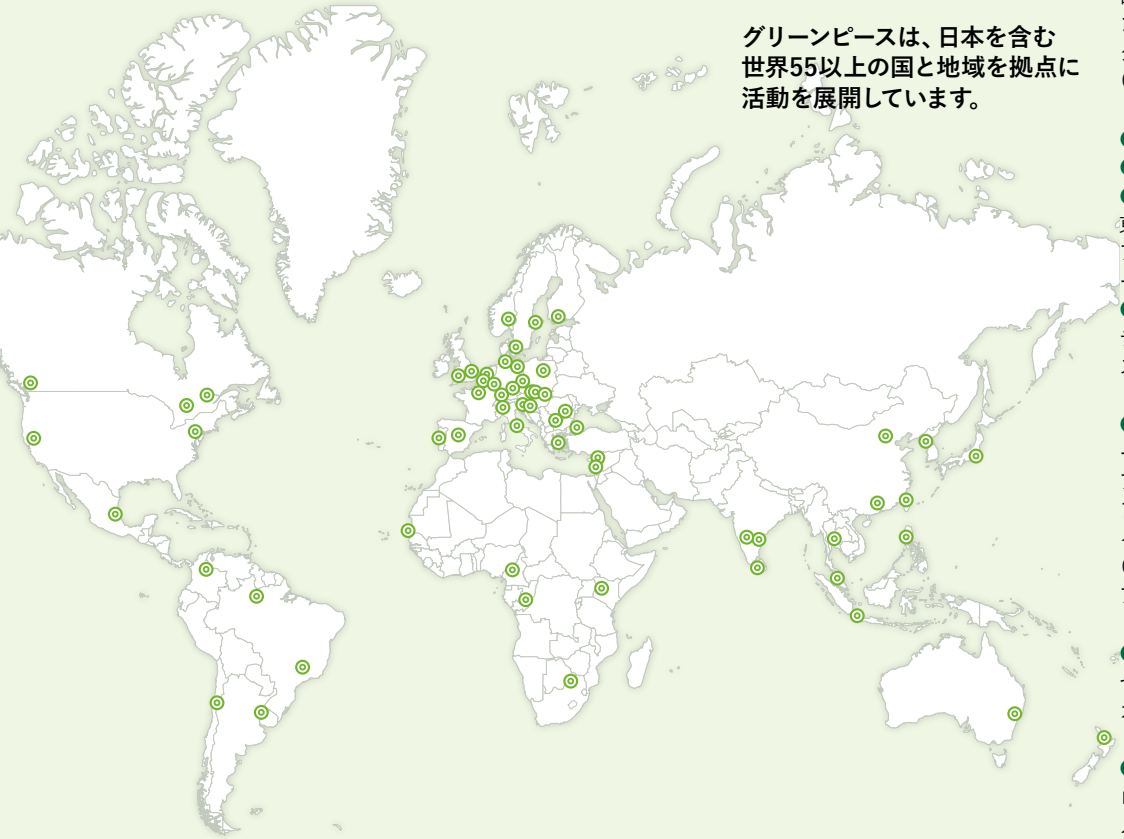
より環境にやさしい世界は、思いやりと包括性があってこそ達成されると、グリーンピースは信じています。

グリーンピース・ジャパン 団体概要

名称	一般社団法人 グリーンピース・ジャパン
所在地	〒105-0004 東京都港区新橋3丁目3-13 Tsao Hibiya 12F
設立年月	1989年4月
代表者	代表理事／青木陽子、寺中誠　事務局長／サム・アネスリー
事業対象分野	地球環境保護（気候変動／エネルギー問題、プラスチック問題、生物多様性の保全など）
活動対象範囲	全世界
活動内容	❶ 環境破壊の実態を科学的に調査・分析し公表　❷ マスメディア、市民メディア、会員への情報提供 ❸ 環境破壊を止めるための行動の呼び掛け　❹ 環境破壊の現場での抗議活動　❺ 政府・企業などへの提案・要請 ❻ 環境問題を解決に導くための代替案の提示　❼ 国際条約の交渉過程を監視、提言
方針	非暴力行動・政治的独立・財政的独立
会員	約5,710人（国内）、約300万人（世界全体）※2024年12月時点
事務局	国内有給職員 37名（うち時間給制職員4名）※2024年12月時点
本部所在地	オランダ・アムステルダム（有給職員約3,454名）※2024年12月時点

世界に広がる活動拠点

グリーンピースは、日本を含む世界55以上の国と地域を拠点に活動を展開しています。



●グリーンピース・インターナショナル（本部：オランダ・アムステルダム）●グリーンピース・リサーチ研究所（英国・エクセター大学内）●リーガル（法律）ユニット（ベルギー・ブリュッセル）

●UK ●イタリア ●オランダ ●ギリシャ ●スイス ●スペイン・ポルトガル ●チェコ ●地中海（イスラエル／トルコ）●中欧＆東欧（オーストリア／ウクライナ／クロアチア／スロヴァキア／スロヴェニア／ハンガリー／ブルガリア／ポーランド／ルーマニア）●ドイツ ●北欧（デンマーク／スウェーデン／ノルウェー／フィンランド）●フランス・ルクセンブルク●ベルギー

●アオテアロア（ニュージーランド）●オーストラリア・パシフィック（オーストラリア／ソロモン諸島／パプアニューギニア／フィジー）●東南アジア（インドネシア／タイ／フィリピン／マレーシア）●東アジア（ソウル／台北／東京／北京／香港）●南アジア（インド／スリランカ）

●アフリカ（カメルーン／ケニア／コンゴ／セネガル／南アフリカ）●中東＆北アフリカ（ベイルート）

●USA ●アンディーノ（アルゼンチン／コロンビア／チリ）●カナダ ●ブラジル ●メキシコ

グリーンピースの活動はすべて、個人のご寄付のみに支えられています。
あらゆる命と未来をまもるため、ぜひサポーターのひとりに加わっていただけませんか。
あなたのご寄付が、世界中で起きている環境破壊を解決へと導きます。

ご寄付でご支援ください

ご寄付は WebサイトやEメール、お電話でもお申し込みいただけます

国際環境NGO
グリーンピース・ジャパン
GREENPEACE
www.greenpeace.org/japan

〒105-0004
東京都港区新橋3-3-13 Tsao Hibiya 12F
Tel. 03-5050-0074
Fax. 03-6838-9242

@greenpeacejp　GreenpeaceJapan　@GreenpeaceJP